

道立水産試験場との研究交流

水産土木研究室

当研究室では漁港に関する研究など純粋に土木的な研究課題のほかに、「栽培漁業型沿岸構造物の開発に関する研究」、「水産増養殖型沿岸構造物の開発に関する研究」や「磯焼地帯における磯場環境制御技術に関する研究」など、水産生物の生態を考慮せねばならない研究課題をいくつか実施している。

しかし、担当者は土木あるいは農業土木の出身者であり、水産生物に関する知識に乏しいのが現状である。

このようなことから、昭和60年度に当研究所の流動研究員に関する規程が整備されたのを機会に、道立水産試験場と流動研究員の招聘についての打合わせを行い、62年度から毎年1週間程度の短い期間ではあるが、道立中央水産試験場（所在地余市町）の増殖部の研究者を招聘して共同研究を行っている。ただし、共同研究とはいえ、期間が限られているので、その内容は水産生物の生理・生態・増殖手法などについて講義をしてもらうことと、お互いの情報交換程度である。

62年度は高丸禮好氏（養殖科長、現在栽培漁業総合センター沿岸部主任研究員）とホッキガイについての研究を実施した。63年度は宮本建樹氏（魚貝科研究職員、現在函館水産試験場室蘭支場増殖科長）

とアワビについて、元年度は松山恵二氏（海藻科長、現在増殖部主任研究員兼養殖科長）とコンブについて、2年度は吾妻行雄氏（海藻科長）とウニについての研究をそれぞれ行った。

なお、招聘期間中に、所内一般向けの講演をしていただいております、毎回10数名の方が聴講されています。

このような研究交流は今後とも是非続けて行きたいと考えているが、問題点はお互いの日程調整がむずかしく、どうしても1週間程度の期間しかとれないことである。この点は、現在はその後の情報交換で補っている。

道立中央水産試験場は平成5年度の新庁舎完成に合わせて、組織体制の充実強化を検討しており、その中には水産工学的な部門の設置も含まれているとのことである。これが実現すれば、当研究室のどちらかといえば土木面を重視した研究とは異なり、生物面により一層の重点をおいた工学的研究を実施することになり、お互いに協力し合えば、土木面・生物面の両面からの研究をさらに推し進めることができ、生物面を考慮した水産土木研究のますますの進展が期待される場所である。

（記 武内智行）